

婚礼衣装

日本の伝統的な礼装と言えばやはり和装。現在でも和装は成人式の振袖や結婚式の白無垢、色打掛など冠婚葬祭には欠かせない衣裳となっています。

◆打掛けて何？

打掛は室町時代以降の武家女性の礼装とされていました。そもそも打掛とは小袖の上からもう一枚同形の衣をひっかけてきたスタイルを意味しています。ひっかけてきた衣が長すぎるため、歩くときに裾を取って歩いたことから「カイドリ」などとも呼ばれていました。夏はかけるのではなく、打掛を腰に巻く姿を正装とし、練貫の黒か濃茶の地に紅の裏をつけていました。

◆打掛が生まれたのは室町時代の絹産業の不作が原因？

婚礼のとき唐衣裳や表着、打衣、五つ衣、ヒト工、緋の袴など多数のきものが必要だった時代に、なぜ簡略したような打掛が生まれるようになったのでしょうか。それは、室町の時代背景と密接な関わりがあったようです。室町時代は貴族の勢力が没落して朝廷の支配は形だけとなり、絹の官営は亡びかけていました。それに加え、応仁の乱をはじめとしていた戦争や農民の反乱がいたるところで勃発。桑園農家も農業どころではなかったため、室町時代の絹産業は致命的な打撃をうけたのです。そんな絹産業の非常事態により、支配階級の贅沢な服装も見直され、小袖に小袖をひっかけてくる打掛が生まれたのです。

◆昔は白無垢を2日間も着ていた？

結婚式は神を祭り神に仕える式とし、女性は白い着物を着て一度神に仕えてから人間の女になるとされています。そもそも昔の結婚式は陰陽の二つの式からなっており陰の式では男女・付き添いの女も白色を着て、3日目の陽の式では色直しとして全員が好みの衣裳にあらためていました。色直しの小袖は当日ムコから贈ることになっており当初は赤地の着物に着替えていましたが、江戸初期になると黒地の小袖に変わっていききました。

◆紋は公家最新のファッション？

着物の第一礼装には5つ紋、準礼装には3つ紋や1つ紋が描かれています。花嫁衣裳においても黒振りそでをはじめとする戦前の振袖には5つ紋がつけられていました。紋というのは花など自然をテーマにした模様が発展し

たもので、古代人の素朴なところを見ることができません。平安中期ごろには公家たちが自分たちの牛車や家具などに当時流行の模様の中から好みのものを選んでつけ、室町時代になると衣服などにもつけられるようになり、いつのまにかその家の印と見なされ武士の家系をあらわす家紋として非常に権威のあるものになっていきました。

◆白無垢は、死に装束？

日本では白は清浄・神聖な色とされ、神の国の色としてきました。そのため葬儀では死者を神の国(黄泉の国)に送る意味から、昔は白い喪服をまとっていました。白無垢はそんな白装束そのものであり、嫁ぎ先で入家の時花嫁がそれを着てたらいで足を洗う儀式を行い新しく生まれ変わったとされていました。

◆普段は奇抜。しかし大切な所ではきちんとキメた織田信長。

信長が美濃の斎藤道三のむこに入った時の逸話。それによれば、信長なかなかのやり手であったようです。信長は世上の風習など全く気にするタイプではなかったため、斎藤は心配し、家老を国境まで迎えにやったのでした。すると案の定、信長は広袖の湯帷子に陰形を大きく染めつけて着用しているあり様。しかし、宿につくと、正装束帯に改め、冠をかぶり姿を正して斎藤方へ向かったため、斎藤はこの信長に2度びっくり。なかなかできる男として、自分の領地もきっと取られてしまうだろうと思ったとされています。

◆秀吉はビンボー婚。

さて、豊臣秀吉の結婚はどうかと言えば、彼の貧苦が極端だった時に行ったため信長と相反し、とても質素なものでした。

妻の晴着も素袍の古着を切ってつぎ合わせ、花嫁の晴着とし、粗末な敷物で祝言をしたといわれており、最下級の婚礼であったようです。その嫁とはおねねと称する「北政所」となった人。華やかな地位からはとても考えられなかった結婚でした。

神前結婚式Q & A

Q. 嫁入りに持参する着物はどちらの紋をつけるのでしょうか？

A. 答えは生家の紋。婿家の紋をつけるのは、結婚後につくる着物が対象となります。嫁入り間もない時には花嫁は2つの紋を共有することになります。